

明日への架け橋 若手技術者!

インフラ維持・整備に取り組む地方公共団体や建設会社の若手技術者にインタビュー。現場からの生の声を、建設関係者やこれから建設業を目指す若者に向けてお届けします。

Vol.17

株式会社ネクスコ・メンテナンス関東
加須事業所 保全第一課

宮内茂人さん Shigeto Miyauchi



小さな違和感を見逃さない

高速道路を守る維持管理の現場



● PROFILE ●

みやうちしげと
宮内茂人

1992年生まれ、茨城県出身。地元の工業高校を卒業後、2011年に株式会社ネクスコ・メンテナンス関東に入社。首都圏中央連絡自動車道や水戸、加須など多くの現場で道路保全工事業務に従事し、経験を積む。趣味はキックボクシングで、大会にも出場している。

今回紹介するのは、株式会社ネクスコ・メンテナンス関東で高速道路の維持管理に携わる宮内茂人さんです。同社が手掛ける高速道路の維持修繕業務（メンテナンス事業）では、道路の清掃や沿線の草木管理、交通事故や老朽化により損傷した構造物の補修・取替、災害時の緊急対応、さらにはサービスイリアやパーキングエリアの草花の管理まで、幅広い事業を展開しています。

入社以来、水戸管内や加須管内などの現場で道路保全工事を経験し、小さな違和感にも気付く「現場の目」を養ってきました。道路を単なるモノとしてではなく、愛着を持って向き合い、何度も現場に足を運ぶ。そうした積み重ねが、確かな感覚を育んでいます。

高校時代に高速道路の建設現場を見学したことをきっかけに高速道路業界を志し、東日本大震災での復旧現場に心を動かされた経験が、今も仕事の原点となっています。派手さはなくとも日常を支える維持管理の最前線で、「安全を第一」に仕事に向き合い続ける宮内さんに、インフラを守る仕事への思いや、現場でのやりがいについて話を聞きました。

東日本大震災で実感した「命の道」を守る維持管理の重要性

——数ある建設分野の中で、ネクスコ・メンテナンス関東を選んだ理由を教えてください。

高校では土木を学んでいましたが、高校1年生のときに東関東自動車道の建設現場を見学する機会があり、その際に「高速道路の仕事を携わりたいいな」と感じたことが、この業界を志したきっかけです。当時はメンテナンス業務への関心が特別強かったわけはありませんでしたが、「高速道路に関わる仕事がない」という思いが次第に強まり、入社を決めました。

——入社前と後で、業務内容に想像していたものとの違いはありましたか。

入社前は、「土木業界＝新しいものをつくる」というイメージが強くなりました。ところが、入社して最初に担当したのは、高速道路のサービスイリアなど、休憩施設の空き瓶の回収や排水溝の清掃といった業務でした。自分が思い描いていた「土木」とは大きく異なり、当初は戸惑いもありました。

しかし、業務を重ねるうちに、社会インフラを守る維持管理の仕事がいかに幅広く、重要であるかに気がきました。今では、道路や周辺地域を守り続ける、この仕事の地道さと責任の重さを強く実感しています。目に見える派手な変化は少ないですが、当たり前の日常を支えている。その積み重ねこそが、インフラを支える本質だと感じています。

——入社15年目を迎え、入社当時と比べて心境の変化はありますか。

新人時代は、目の前の作業をこなすことに必死でした。道路に開いた穴や、壊れた構造物を補修するなど、与えられた業務を確実に完遂することで精一杯で、一

つ一つの業務を「点」として捉えて仕事をしている感覚でした。

今は、日々維持管理している高速道路が、物流や救急搬送、そして地域の生活を支える「命の道」であることの重みを意識しています。一つの補修が地域全体の安全を支えているという誇りを持ち、より広い視野で優先順位や補修方法を考えるようになりました。

——この仕事を続けるうえで、原点となっている出来事がありますか。

入社前の3月、アルバイトとして当社で働いていた際に東日本大震災が発生しました。地震の影響で道路や法面が崩れ、大きな被害が出たのですが、当時はアルバイトだったため現場を離れるよう帰されました。

しかし、先輩方は昼夜を問わず復旧作業にあたり、数週間後には道路が元通りになっていました。その姿を目の当たりにし、「すごい」と感じたことを今でも覚えています。自分が大変だと感じるときも、あのときの先輩方の姿を思い出しながら業務に向き合っています。

課題に全力で向き合いながら安全・安心な高速道路空間を守る

——これまでの業務で特に苦勞した経験を教えてください。

限られた予算の中では、優先順位をつけながら維持管理を行うことが常に求められます。地域の方から「樹木を切っしてほしい」といった要望をいただくこともありますが、全てを伐採してしまうと法面が崩れやすくなったり、新たな雑草が生えてきたりする可能性もあります。安全や将来への影響を踏まえ、双方が納得できる着地点を見つけるために、根気強く説明を重ねる

必要があり、その点に苦勞しました。

また、「本線に生きたイノシシがいる」と連絡を受けた際には、交通を止めて安全を確保しながら、関係機関と連携して対応しました。山間部を抱える事業所では、野生動物の対策にとっても苦勞します。

こうした対応に加えて、24時間365日、高速道路利用者の皆様に安全・安心な高速道路空間を提供することも私たちの使命です。事故や災害が発生し、高速道路が通行できなくなった際には、「いかに早く交通を開放するか」という時間との闘いが常に求められます。しかし、現場で起きる事象は毎回異なるため、その都度ベストな対応方法を考え、判断し、臨機応変に対応しなければなりません。

さまざまな事象に対応しなければならぬ点に、難しさと苦勞があります。

——維持修繕業務の中で、最もやりがいを感じる瞬間はどんなときですか。

何事もなく高速道路に車両が走行している状況を見ると「安全・安心な高速道路空間を提供できている」と実感しますし、そうした何気ない普段の光景にやりがいを感じます。維持管理業務は本当に幅が広く、毎回新しい発見や学びがあります。これからもさまざまな課題に直面するでしょうが、その都度、全力で向き合いながら経験を積んでいきたいと考えています。

——沿道にお住まいの方々の生活を守ることも重要な役割ですが、地域とのつながりを実感したエピソードがあれば教えてください。

高速道路という重い構造物を建設した影響で、軟弱な地盤の地域で地盤沈下が起こり、米作りに影響が出たことがありました。田んぼへ水を送る水路が沈下し、水が十分に流れない状況になっていたのです。そのままでは米作りができなくなるおそれがあった

め、用水路を補修しました。後日、その地域を訪れた際に「おかげさまで米を収穫できた」と声をかけていただき、維持管理の仕事が地域の暮らしにつながっていることを改めて実感しました。

何百回、何千回の現場経験が 小さな違和感に気づく力を育てる

——業務において心がけているポイントは何ですか。

現場での作業開始前の段取りには、特に気を配っています。不確定要素をどれだけ減らせるかが、安全や品質、そして作業の円滑な進行に直結するからです。

「段取り八分」という言葉がありますが、まさにその通りだと実感しています。ただ、私たちの仕事はゼロからつくるのではなく、既存の構造物を補修・改修することが中心です。法面を掘った際に凶面にはないものが出てくるなど、予想外の事態が起こることも少なくありません。だからこそ、事前確認や関係機関との協議を丁寧に重ね、できる限り予測できない要素を減らしていくことを大切にしています。

——判断に迷ったとき、何を基準に決断していますか。

やはり「安全」ですね。当社の行動方針には、「全てにおいて『安全』を優先します」というものがあります。ひとたび事故が起きれば、工事は止まり、その結果工期が延びてしまうことにもつながります。現場が終わって、工事に携わった人みんなが無事に帰宅できるのが一番だと思っています。

——車で担当管内をパトロールする業務もあるそうですが、点検上の数値や写真には表れない違和感を感じる瞬間はありますか。

車の中からでも、外の景色を見て「何かおかしいな」と感じることがあります。そうして現場に降りてみる



高速道路の安全・維持管理を行う高速道路パトロールカー（道路管理車両）。安全確保のために日々巡回を行い、事故や異常が発生した際にはいち早く現場に駆けつける。

と、実際に壊れていた、ということも少なくありません。うまく言葉では説明できないのですが、入社以来、何百回、何千回と道路を走ってきた中で、自分の中に「正常な道路の状態」が蓄積されています。そのデータと目の前の景色が異なるとき、違和感を感じるのだと思います。

また、道路を単なるモノではなく、血の通った存在のように大切に想う気持ちも大切だと思います。家族

や友人の小さな変化に気づくように、道路と日々丁寧に向き合い、「愛着を持って接すること」で、わずかな変化にも気づけるのだと思います。

現場は日々変わる“生き物” 足を運び続けることの大切さ

——今は現場での作業よりも、マネジメント業務がメインになっているようですが、「人に教える」という立場の難しさや、やりがいについて教えてください。

自分が意図したことをどのように伝えるかは、本当に難しいと感じています。現場には異なる経験を持つ人が多くいるため、例えば専門用語ではうまく伝わらない場合には、違った伝え方を考えるなど工夫をしています。苦労もありますが、それが自分の成長にもつながっていると感じています。

また、無事故で工事が終わったときには本当に安心しますし、強いやりがいを感じます。

——現在のインフラ維持管理についてどのように感じていますか。

老朽化は確実に進んでいると実感しています。これからは構造物を長く使い続けるためには、維持管理の重要性は今後さらに高まっていくと思います。決して派手な仕事ではありませんが、社会インフラを支える根幹を担う仕事だと考えています。

——御社は技術開発にも力を入れています。その中でも注目している技術はありますか。

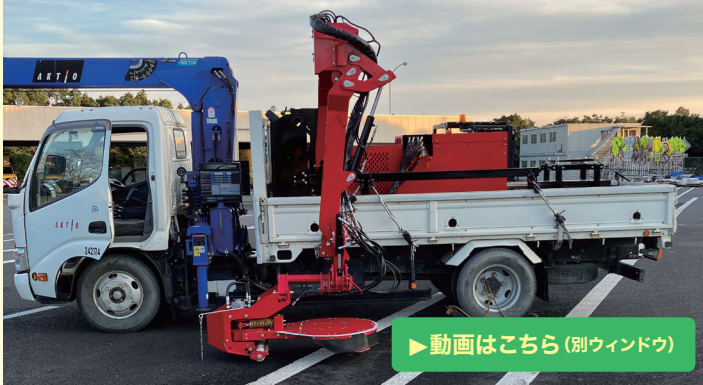
自動草刈り機の導入は、現場で非常に助かっています。従来は肩掛け式の草刈り機を使用し、人力で作業を行っていましたが、特に夏場は熱中症のリスクが高く、作業者への負担が大きいという課題がありました。現在は自動掃除機のように自走するロボット型や、

「ネクスコ・メンテナンス関東」開発

高速道路のメンテナンスを支える製品

ネクスコ・メンテナンス関東では、長年の保全業務で培ってきた現場のノウハウや、取引企業との共同により、作業の効率化や安全性の向上に加え、作業現場の衛生面や環境負荷の低減にも配慮した技術開発に取り組んでいます。

車載式草刈機



▶ 動画はこちら (別ウィンドウ)

草刈り作業の改善と安全性・効率性の向上を実現。2tトラックへの搭載が可能で、格納時はコンパクトに収まり、回送も安心して行うことができる。

自走式芝刈り機



▶ 動画はこちら (別ウィンドウ)

作業の効率化と省人化を目的に、自走式草刈機の導入を進めている。

MKサイン



ラバコンにかぶせるだけで簡単に設置が可能。軽量・コンパクトな折りたたみ式で、収納や持ち運びにも便利。

雪氷車両洗淨機



雪氷車両の洗淨作業を人力から機械による自動化へ移行し、安全性と効率性の向上を実現。

● 取材後記 ●



「愛着を持つ」という一言に、宮内さんの仕事に対する熱い思いが凝縮されているように感じました。小さな違和感を積み重ねることが、確かな成長へとつながる。継続することは何よりも大きな力になると改めて気付かされました。当たり前のように利用できる道路は、こうした技術者の「安全」への強い思いと「経験」によって支えられています。

(取材日：2026年2月)

糧になるはずで、

また、若いうちにたくさん挑戦し、失敗を経験してほしいと思います。失敗しても上司や先輩が必ずフォローしてくれまし、その経験は最後には必ず自分の糧になるはずで、

「次世代を担う若手技術者にアドバイスをお願いします。」

とにかく現場へ足を運び、自分の目で見て、実際に触れることが何より大切です。現場は「生き物」だと言われますが、前日とは異なる表情を見せることがあります。図面やデータももちろん大切ですが、その微妙な違いは、実際に現場に行かなければ感じ取ることができません。足を運び続けることで、自然と「見る力」や「気付く力」が養われていきます。こうした積み重ねの先に、ふとした瞬間、自分のレベルが一段上がっていることに気付くはずで、